出版社
・　中国達斡爾族人物録編委会、『中国達斡爾族人物録』、黒龍江省人民出版社、1997 年
・　呼倫貝爾盟史志編纂委員会、『呼倫貝爾盟志』、上、中、下、内蒙古文化出版社、1999 年
英語文献：
・　Kou Tao-fu, “Modern Mongolia”, *Pacific Affairs*, Vol.3 No.8.1930

◆◆◆◆◆　　◆◆◆◆◆　　◆◆◆◆◆

●座長（森）―　ただいま暁敏くんから、「文化的変容からみたダフール族」についての報告を聞きました。次にコメンテーターの伊藤先生から、ただいまの報告に対する感想を述べていただきたいと思います。

●伊藤―　私は主に韓国社会の研究に関わってきましたが、もともと中国にはたいへん関心がありまして、特に少数民族には学生のときに非常に関心を持っていたのですが、専門ではありません。一番専門でない人が真っ先にコメントをするのもどういうものかと思って、聶さん先にやりなさいと言ったのだけれども、決まっていると言われて困惑しております。ダフール族の地域を訪ねたこともないし、初めてのダフール族は暁敏さんで、それも昨日です。

「文化変容」とあるものですから、実態について何か問題点が指摘されるかと思って、その点についてコメントしようと考えていました。しかし、ただいまの報告は主として民族自治が成立する歴史的な経緯と、地域的あるいは外的状況との関連が中心となっていました。私は、まず何よりも現地のネイティブスから直接に話をうかがってたいへん勉強になりました。その中で、ダフール特有ともいえる点がいくつか指摘されています。地域差が大きいという点、そして自治の動きにはすでに自治旗時代からの運動の伝統がありました。しかし、いずれもフルンボイルを中心にした話です。言語には独自の文字はないのですが、モンゴル文字（満州文字）で表記されたものがあります。しかし、教育は漢語・漢文が中心とのことです。そのへんが今ひとつ整理できないのでもうすこし説明してください。満州文字でもって子供たちが詩を読んだりする状況が、どこか牧民地区でもあるのかどうか。以前、シリンホト郊外のパインタラという所のゲルで、子どもがモンゴル文字で詩をとうとうと読むのを聞いて感動した覚えがあります。そういう状況があるのか、内モンゴルのモンゴル族とはだいぶ違うようにも思えます。確認したいと思います。

次に、牧民地区と農耕地区にまたがってダフールと呼ばれていて、牧民地区では内モンゴルに近いし歴史的な運動を経ているので、今でもそうした志向があるようで、そうした地域差は良く分かってきたのですが、その一方でいったい文化変容ということで特に何を指摘したかったのか、その点を確認したいと思います。

先に言ってしまうと、文化変容論というのは実は非常に問題がありまして、何か客観的な文化という指標を取り上げることによって、人々の生活とかアイデンティティとか、いろいろな問題を扱うはずなのです。文化というのは、そういう方法論として設定されたものですが、文化を語ることによって当事者の生活者、あるいは人道的な保障であるとか、いま言うヒューマンセキュリティーとか、もともと生活という概念で語られるべきものが、人間抜きの文化を語ることによって密閉されるような問題が指摘されているわけです。

文化変容論、特に植民地化過程において、二つのものがどういう影響を及ぼしたのかを、研究者はまるで実験室のガラスのなかで、実は介入する先進国の側にいるにもかかわらず、要するに当事者の一角であるにもかかわらず、文化変容論というパラダイムで語ることによって、問題の本質というか責任を回避しているという指摘です。それは開発論の中でも言われている点です。

ですから、そういうときに文化変容論として、ダフール族自身の方がダフールの現状について、文化を語ることにどういう意味があるのでしょうか。民俗学・人類学において、文化は非常に重要なツールでありましたけれども、ややもすれば、繰り返しますが生活者とかヒューマンセキュリティーという、もっと重要な問題が覆い隠されてしまう可能性があると私も思っておりますので、その点を確認したいと思います。またあとで少し残りの話をやります。

●座長― それでは、二番目のコメンテーターの聶莉莉先生にコメントをしていただきたいと思います。

●聶― 私はダフール族についてあまり知識をもっておりませんので、適切なコメントができないと思いますが、今まで考えたことも含めながら質問させていただきます。

まず、第一に、暁敏さん個人に質問したいです。ご専門は経済学とうかがいましたが、今日の発表は、どちらかというとご専門外ですね。しかし、ご自分の出身民族の歴史や民族識別の過程、現在までの変化など、たいへん詳細に紹介されました。ここまで準備されるのは、たいへん苦労されたか、それともこのような知識は自民族の中でみんなにある程度知られており、インテリなら誰もがより気軽く整理できるのか、このへんのことを教えていただきたいです。

第二に、暁敏さんのレジュメの最後の図表についてです。これは、一つの締めくくりとも思われますが、ダフール族の文化的複合性や複合的民族共同体という性格をはっきりと示しました。ダフール族にある様々な要素や、民族の内側と外側の相互作用が見られました。そこで質問ですが、ダフール族は民族識別以前には、一つのカテゴリーとして既に存在していましたか、それとも存在しませんでしたか。もしも、カテゴリーが既に存在したとしたら、その民族としての自律性はどのようにもっていたのでしょうか。また、そのカテゴリーの外側は、蒙古族や満州族のみではなく、清王朝や中華民国、中華人民共和国という国家的存在も見られるのではないでしょうか。

先ほど南京への陳情や、自治旗や自治区の成立などをめぐってのいろいろなやりとりをご紹介いただきました。そのような活動において、どのような方々がリードをとったのでしょうか。そのリーダーたちは、民族的なリーダーでもあるのでしょうか。

ダフールという民族共同体は、内部の構造がどうなっていたのでしょうか。それに関して、暁敏さんの話にも「上層部」や「民族識別工作隊の協力者」などが出てきましたが、その人たちは民族共同体の中でいったいどのような位置づけなのでしょうか。

第三に、現在全国的に分散しているダフール族の連帯についてです。

去年、渡邊欣雄先生も参加された北京調査の時に、ダフール族の父親とオロチョン族の母親をもつ一人の女性と出会いました。彼女は五人姉妹の末っ子であり、うえの四人のお姉さんは父親の民族所属に従ってダフール族ですが、彼女のみが母親と同じ民族所属です。お姉さんたちはダフール族語を話せるが、彼女は話すことができません。しかし時々、北京で仕事をしている二番目のお姉さんに連れられ、北京在住のダフール族の集会に参加しているそうです。ダフール族の集会は頻繁に開かれているようです。

暁敏さんのレジュメには北京在住のダフール族は 200 人ほどと書いてありますが、彼女によると、集会には参加者が多い場合 100 人ほどでした。集会の用語はダフール語であり、みんなの話には漢族の悪口が度々出てきており、日頃のストレスを発散する場となったと思われます。このような集会は、正式の組織ではありません。中国では正式の組織は、政府の許可をもらわなければなりませんが、少数民族の組織に対して、政府はなかなか許可を与えないのが現状です。但し、非正式でも、漢族の海に分散している民族同士にとっては、互いにつながる網の目となっているのが確かです。

暁敏さんの話には、「内蒙古ダフール歴史語言文学学会」のことに触れましたが、それは、政府に認可された正式組織であると思いますが、学術研究以外に、ダフール族の方々にとって何らかの意味をもっているのでしょうか。要するに、ダフールのような離散している民族は、民族同士のネットワークは、地域ごとにあるか、それとも全国的にもっているか、その現状はどうなっているかを知りたいです。

以上の質問をお教えいただければ、幸いです。

●座長―　それでは最後に、周先生のコメントをいただきたいと思います。

●周―　はい。18 年前のことで、調査ではなかったけれども、一度モリンダワ自治旗に旅行しました。その時の記憶としては、大きな、高い土台に置かれる旗政府の駐在地とその周辺の風景ですね。周辺を眺めると、一面の農地があって、その中にいくつか農家の屋敷とか小さい村が見えました。隣の方に聞いてみると、漢民族の移民で山東省あたりからやって来たという。最初は、少数ですが、だんだん村にもなったのです。

ダフール族の研究をしていないので、コメントというよりも、若干の質問をしたいと思います。まず、ダフール族の名字及び姓についてです。漢族式の姓について注目したいと思います。なぜかというと、漢族式の名字で名付けられた世代は、少し時間がたつと、だんだん「漢化」されるようになってしまうというイメージがありますね。中国古代の歴史において、少数民族の上層部は「漢化」を進めるために、よく使う方法なのです。ここで知りたいのは、先ほど黄色のスライドです。黄色の８大名字、有名人、あるいは独立運動に積極的に取り組んでいる人たちは、そのなかから良く出てきますね。その下は、半分ぐらい、色がなく、白ですね、それはどこかが違うんですか。上のほうは上層部、或いは貴族とかエリート層ですか。

先ほど聶さんの質問とも絡んでいますけど、暁敏さんのスライドを見ると、若干の自己矛盾があるのではないかと感じました。例えば、民族識別工作が実施される前に、ダフール族自治区が既に出来たのですね。1956 年に単一民族として識別されたが、その前の 1952 年、既にダフール族自治区があり、そして、中華民国時代、「自衛軍」のリーダーもダフール人だったとおっしゃいました。つまり、その時は、「ダフール」というグループあるいはカテゴリーがすでに存在したのですね。この点について、私も聶さんと同じ、知りたいです。

たいへん申し訳ない、先ほど「自己矛盾」と言ってしまったが、例えば、プリントの 42 ページ、ダフール族の言語について、語彙は 50 パーセントがモンゴル語と書いていますね。それから、知りたいのは漢語の語彙がどれぐらいを占めていますか、全くないですか。中華民国時代には、漢語もちゃんと使われましたね。また、暁敏さんの挙げた例ですけど、満州語の文章のなかに、「理事」や「理事長」など、漢語語彙の存在をもご指摘したけれども、そこには漢語の語彙は全くないと受け止めても宜しいでしょうか。

モンゴル族の中核的な上層部なのか、あるいはモンゴル族のたくさんの部落とか地域集団・方言集団の一つなのか、一体ダフール族は、教育を良く受けたエリート層だけなのか、あるいは何か特別な文化伝承を持っている集団なのか、その時のモンゴル族の中で、かれらはどう位置づけられたのか、ご説明して頂きたいですね。

モンゴル族から民族識別によって識別されて、つまりモンゴル族と切り離されて単一民族になったが、たまには、そのアイデンティティも、満州族とモンゴル族の間に迷っていることもありますね。大変まれのケースだと思いますけど、その辺のメカニズムは良く分かりません。ダフール族は、この点で言えば、とっても面白い民族だと思われる。我々の常識ではなかなか旨く整理することが出来ない民族でもあると思います。

一番、理解し難いのは、ダフール族の人々が、独立の代わりにモンゴル族と分離し単一民族になったという歴史的経緯です。それはモンゴル族という「母体」から、つまり自分たちもともと所属していた民族からの分離・独立ですね。現在は民族自治地域とか、単一民族として認められているわけです。かつては、モンゴル族独立運動の中核でしたが、結局、自分たち所属していた民族或いは同胞を放棄したと言っても宜しいでしょうか。それは、もともとのモンゴル族にとっては、いわゆる中核を失い、大きな打撃を受けたと理解しても宜しいでしょうか。この問題は、たいへん難しいけれども、どうかもう少し教えて頂きたいです。

どうもありがとう御座いました。

●座長―　以上、３名のコメンテーターの方から、それぞれいくつかの質問をされていますけれども、これらの疑問点に対して暁敏くんから答えていただきたいと思います。

●暁―　実は昨日から緊張していて、やっと少し落ち着きました。たくさんのご質問とご指摘どうもありがとうございました。

まず伊藤先生のご質問ですけれども、ダフール特有の、先ほど出した満州語のことですけれども、満州語ができるというのは、たぶん理事長の個人的な好みかもしれません。満州語を教えている人のなかでは、ダフール族が一番多いというのはよく知られています。理事長の方は内蒙古大学蒙古学学院で教鞭を執っていますけれども、満州語が堪能で、それを誇りに思って出したのか、そのへんはちょっとわかりません。

実際、いま、若い世代は言語さえできない状態にあります。満州語ができるというのは、ほぼ不可能ということになっています。清朝時代に使っていましたけれども、民国期に入って漢語を使うことになったので、いまも漢語を中心とした教育を受けています。

これも地域的に相違があります。ハイラル地域ですと、モンゴル語の教育が中心です。なぜ漢語を中心に勉強することになったかというと、ほかの民族についても言えることですけれども、一つには就職の問題があります。自民族の言葉で勉強したら、就職口ははるかに少ないです。

逆に私の立場から、おそらく朝鮮族研究の一番権威である聶莉莉先生に一つおうかがいしたいのは、朝鮮族はもちろん 10 点の優遇政策の対象になりますね。朝鮮族が自分の朝鮮族の言語を学んだ場合は、その 10 点はどうなりますかという素朴な質問です。

●聶―　入学試験のときの点数ですか。

●暁―　そうです。

●聶―　それは民族所属だと思います。出身学校ではないと思います。

●暁―　いいえ、朝鮮族が朝鮮語を学んだ場合はどうなりますか。

●聶―　それは明らかに入学試験や将来の就職にも不利です。ですから、いま、朝鮮族自治州では、朝鮮族の学校、即ち朝鮮語で教える学校が入学者数が少ない理由で次々と閉鎖されていきました。子どもたちは漢族の学校に行きたがる、正確に言えば、親たちは子どもを漢民族の学校に行かせたがるからです。

●暁―　だいたい 10 点で少数民族を点数で優遇するというのは、公の場の優遇政策になっています。それと裏腹に、少数民族は自分の民族、あるいは少数民族の言語を学んだ場合は、その対象外になるのですね。

政府の説明ですと、自民族の言語を学んだ場合は対象外になります。自分の民族以外の言語を学ぶときに 10 点の優遇があります。そこで問題です。私はダフール族です。モンゴル語を勉強しました。そうしたら、さっき言ったように 10 点の優遇になりますね。でも、少数民族が少数民族の言語を学んだから、その対象外です。

つまり、はっきり言えば、モンゴル族が漢語を勉強した場合は 10 点の優遇と見ていくのです。みんな漢語に走っていくのです。これも一つのポイントではないかと思います。そうしたら、もちろん少数民族は、自分の言語を勉強する比率が減ります。これが第一の質問です。

次は、牧民と農耕の変容ということですが、最後の締めのところで時間がきまして、ちょっと説明不足だったかもしれません。私から見た文化的変容ですと、もし識別されなかった場合、そのままモンゴルのなかに入っていれば、一つの民族の地位的な個性を有していたかもしれません。モンゴルから出て行ったからこそ独自の、ひとことで言えない周辺民族のいろいろな特徴を有する文化、周辺民族に影響する文化、文化的複合性が形成されたのではないかということなのです。

フルンボイル地域は、多民族多文化を有する地域ですが、諸民族の間で共通するものもあり、他文化を影響し、影響されてきています。一つの例は、実際、エヴェンキ旗の南屯（バヤントハイ鎮、エヴェンキ自治旗の政府所在地）というところに行くと、だいたい印象のなかでは少数民族が漢族に同化される、漢化されるというイメージですけれども、その南屯では、そこのブリヤート人、エヴェンキ族とオロチョン族、モンゴル族、漢族、みんなダフール語が通じます。これがちょっと不思議に思います。

もう一つ、ダフール族のアイデンティティ的な象徴というのは、柳藁菜というものです。ダフール語ではクンビル、日本ではたぶんヨモギですか。それを食べる習慣があります。昔、ダフール人しか食べていないものが、いまフルンバイルのどのレストランに行っても出るのです。なぜかというと、漢族がダフール族はこれが好きだと知ったからです。それは自分で山に行けばどこでも採れるものでして、漢族はそれを知って栽培するようになり、それを販売して一気に広がったのです。

私は、文化には必ず地域性があるということを強調したいと思います。ダフール族のなかでも、居住する地域によって農耕か遊牧というのはありますが、もう１回繰り返しますがモンゴルから出なかったら、モンゴルのなかの地域的な特性を有していたということをちょっと言いたいです。

次は聶先生の質問で、第一に資料についてですが、一部はちょうど家にありました。もしなかったら、これはたいへんかもしれません。こういうものとか、特に『ダフール族研究』という学会誌が、いまはなかなか手に入りません。また、ダフール族に対する知識は、知らない人が多いです。いや、知ろうとしないです。

最後の文化的複合性の図についてですが、先ほどのご質問にもたぶんからんでいると思います。ダフールとしてあったかどうかの問題ですが、昔はダフールモンゴルというのがありまして、あく

までもモンゴルのなかの部族として意識していましたので、一つの部族といいますか、それとも地域的な部族といいますか、非常に説明しにくい部分があります。

概して言うと、モンゴルという概念も非常に大きな概念です。そのなかにいろいろな部族が入っていますし、それを細かく分解すると、たぶん 10 以上あります。ですから、ダフール族はモンゴルのなかの一つ、ダフールモンゴルという意識があります。

もう一つ、ダフール族のつながりですが、これは非常に強いです。ダフールモンゴルのなかにあったときにしろ、出てきたときにしろ、非常に強いです。北京では、たぶん週１回か月１回の集まりがあります。フフホトではけっこう頻繁にやります。しかし、民族は何だということに対して、いま定着しているのは契丹説です。それについて、みんなとても誇りに思っています。

一つの例として、さっき言った学会誌の創刊号、第１号のときに、何の理由かわかりませんが、契丹源流説の論文がずらっと載せてありました。モンゴル源流の論文は１本もないのです。これが何を意味しているかというと、つまり一つの民族として意識が生まれたので、モンゴルということを認めたくないのです。モンゴルのなかに入っていたときでも、自分がモンゴルのなかでより優秀な部族だという意識が、ダフール人のなかにはあったのです。知識人が多いですね。あと、満州国期に入ると、日本の留学生がたくさん増えました。極端な例を見ますと、いまちょうどこの画面に出ました。一番上の成徳という人です。これは『蒙古秘史』という非常に解読が難しいものを、初めて復元した人です。

もう一つは、例え話をしたらたくさんありますけれども、モンゴル族を代表する「敖包相会」もダフール人が整理して作曲したものですし、内蒙古自治区には二人の院士がいますが、その一人はダフール人です。もう一つ言いますと、内蒙古地区で初の工科学院の基礎をつくったのもダフール人で、モンゴルのなかで優秀な部族という意識がダフール族の中にはあったかもしれません。こういう意識があったことと、フルンボイル地域でのリード的な存在というのが、かなり強かったと思います。

次の周先生の質問に対しては、ちょうどこれなのです。ご指摘のとおり、意味がありました。上の塗りつぶした部分が８大名字です。これだけ見ると名前の由来ですが、これは全部モンゴル、あるいはロシアにある川の名前です。もともとモンゴルの地域に住んでいたのではないかという、契丹の源流説をすぐ覆すことができます。これは８大名字で、下にあるのは何かと言いますと、清朝に入ってから嫁さんに付いて来る家来たちに授けた名字です。ダフールのなかの漢族、漢族ダフールと言ってもいいのですが、その名字です。

次は、モンゴルのなかの位置付け、さっきの答えにもなったと思います。モンゴルに向かって強い意識はなぜというのは、それが答えになるかと思いますが。言語のなかで漢語の比率はどのぐらいかといいますと、だいたい分けたのはこの三つですけれども、もうちょっと細かく分けると、漢語とオロチョン語とエヴェンキ語、一部由来が不明な語があります。いまはたぶん漢語の比率がどんどん上がってきているのではないかと思います。

自分の民族を捨てたのはなぜというのは、それはリードしてきたので、逆に強いモンゴルに対して帰属意識があったのに、しかも高度な自治の原則、内容の枠組みをつくったのに、モンゴルと合流したあと何がきたかというと、何もなくなったのです。では、これから自分の民族になろうというのが原点ではないかと思います。それが中国の民族識別政策に合致して、いまのダフール族が生まれてきたのではないかなと思います。

最後の図なのですが自分でもちょっと整理しきれていないのですが、私はこういう動向を脱モン

ゴルという言葉で呼んでいます。なぜ文章に載せていないかというと、やはりまだ整理しきれていない部分がありますので、ちょっと抽象的で相関的な議論で申しわけありません。

●伊藤―　モンゴルの中でも非常に優秀だという意識、そして知識人の存在が重要であることが分かってきました。それから、生業面では地域差がずいぶん大きいことも。もとは遊牧が大きなウェートを占めていたのでしょうが。優秀意識とか知識人の存在というのは農耕と関係があるのでしょうか。それからもう一つ、たしかダフールは商業活動にも非常に積極的でしょう。

●暁―　はい、そうです。

●伊藤―　その商業活動について触れてないけれども、それはどういう背景なのか。それが脱モンゴルとどう関係があるのかという点をうかがいたいです。

●周―　ちょっと一つだけ。56 年前後、民族識別調査者としてダフール族出身の方がほとんどだったと理解してもいいですか。

●暁―　上の３人のなかの二人がダフール族です。

●周―　マンドロト（満都爾図）と。

●暁―　エルドンタイ（額爾登泰）です。次のバダロンガ（巴達栄嘎）はダフール族で、ナムスライ（拿木四来）がモンゴル族です。

●周―　ありがとう。

●暁―　伊藤先生のご質問ですが、非常に商売がうまいというのは、まさにそのとおりです。漢族も負けると言われるのを耳にしますけれども、おそらく漢族がフルンバイル地域に入っていったときに、ダフール人を介してオロチョン族とエヴェンキ族に接したのではないかと考えます。

アンダという概念があります。こちらに満州族を研究なさっている方いらっしゃると思いますが、アンダというのはモンゴル語では友だち、盟友という意味です。ダフール語のなかで、友だちよりもアンダは、オロチョン族をアンダにして、オロチョン族は狩猟民族ですから、ダフール族はそれほど巧みではないです。

ダフールは、農耕、特に大興安嶺の東側です。食糧とか作物など、固定収入があります。それを持って、オロチョン族にこのぐらいのものを出して、一緒に狩りに行きましょうと。狩りに行って得たものを、ダフール人がもらって売るのです。そういう商売をやっていました。

ダフール族は非常に民族を団結させる側面があるのです。ちょっと記憶が定かではないのですが、ラティモアが一つ言っています。文化的融合と経済的統合。

◆◆◆◆◆

●座長―　３名の方からコメントと、それに対する暁敏くんの回答を得ました。次に会場の方々のなかから、今回の報告に対して何か聞きたいということがあれば、積極的に発言してもらいたいと思います。

●加々美―　二つございます。一つは、政治的な側面についての位置づけがほとんどなかったものですから、お聞きしたいのですが、何人かのモンゴル出身の方々と議論させていただいた過去の経験で、特にアイデンティティの問題にかかわってウランフの役割が非常に大きいということ。といいますのは、内モンゴルというアイデンティティですね。これは先ほどダフールが、いまはモンゴル国ですが、昔は外モンゴルと言っていた、そことの統一、独立というか、そういうことが試みられた。

しかし、アイデンティティで言うと内モンゴルは、実は外、内というのは高さんが書かれたことですが、どちらかというと空間的な概念として私たちは考えるけれども、そういうものではないわけです。アイデンティティの問題で言えば、意識の軸にもっと別々の人間だという意識が背景としてあるのです。

にもかかわらず、内モンゴルというアイデンティティは、なかなか形成しなかったと言われます。つまり、先ほど言いましたように、ダフールはダフールで、昔の外モンゴルとつながろうとします。いまで言う内ですが、内モンゴル全体としてアイデンティティを形成するという発想がなかなかなかったのです。

先ほど、ダフールはやっと内モンゴル自治政府に吸収されたと言われましたけれども、お話になっていた統合を求める、あるいは独立を求める方向性はもともとは外に向かっていたわけですよね。しかし、中華人民共和国成立以前の 47 年に内モンゴル自治政府が生まれ、またそれより少し前にフルンバイル地方自治政府があって、そこの行き交いで最終的には内モンゴルに統合されていきます。ウランフの役割は、その意味で内モンゴルというアイデンティティを生み出した、そういう議論を内モンゴルの諸々の研究者の方々から、何度か聞いた覚えがあります。その点をまず知りたいと思います。

それから人口のポイントで、ダフールだけの人口が書かれていて、モンゴル全体、例えばダフール以外のモンゴルのほかの人たちの人口増大の比較はどうなっていますか。さらには、漢族が大量に入ってくるわけです。そのなかでダフールの人はどうなるのか。簡単に言うと、内モンゴル人自身のアイデンティティが、そういう意味では漢族の大量流入とともに大きく変容しているはずですし、もちろんそういうことはたびたび問題になっている市場経済の大量流入とも深いかかわりがあります。

そうすると、そういうデータも決定的に重要で、13 万 2394 人という単独の数字では、実はアイデンティティの問題が目に見えてこないということです。そのことと、さっき言った内モンゴル人としてのアイデンティティというもの。これが成立したのちにダフールが、内モンゴル人のアイデンティティとは違う独自のアイデンティティを求めていくとすれば、それは何なのか。

つまり、内モンゴル人のアイデンティティは、簡単に言うと中国という世界とのつながりのなかで出てくるわけです。そのぶんが、ダフールだけ見ていると見えてきません。ダフールをそのなかで相対化することで、初めてダフール人のアイデンティティの変容も見えてくるのではないかと思います。長くなりました。

●座長―　質問を一言で表現するとどうなりますか。

●加々美―　質問としては、内モンゴル人というアイデンティティについて、どう思うかということです。

●暁―　ちょっとウランフについて、実際、ウランフという人物を評価するのは非常に難しい面がありまして、マイナスとプラス評価が様々ですが、私から言うとやはり客観的に評価したほうがいいのではないかと思います。

一つ言えるのは、もしウランフという人物がいなければ、内蒙古自治区の「自治区」というものも存在しなかったのではないかと思います。早稲田のブレンサイン氏も民博のシンポジウムの口頭で発表した時に、モンゴルを四つに分解していました。第一に森先生のご専門の西部徳王政権、次に中部のウランフ、そして東部、昔一部が満州に所属していた東蒙自治政府、さらに言えば第四が何かと言うとダフール人で、四つに分類してあります。

こう分類しているときに、内蒙古は一緒になったことがあまりなかった、内蒙古としてのアイデンティティが生まれてこなかったというのは、その地域から見ると従来分断された地域です。昔は列車で北京まで行かないと、フフホトまで行けませんでした。西と東は。ですから、そういう分断された経験、地理的な条件があります。

また、内モンゴル自治区というアイデンティティですが、私はあくまで地理的な名称ではないかと思います。それをモンゴル語で表現すると、つまり、内蒙古の自治区ですね。

内モンゴル、外モンゴル、これは清朝の時代に生まれたものです。ゴビ砂漠の北と南です。内側に６チョゴルガン（盟）49 ホショー（旗）で分けたのです。その名称がずっと続いてきて、あくまで内蒙古という地域を指すのです。もし、ほんとうに民族自治を考えた場合、なぜ「内蒙古蒙古族自治区」にならなかったか。そういう疑問点をいつも感じます。ちょっと答えになっているかどうかわかりませんが。

●梅村―　ひとこと簡単な質問です。先ほどのアイデンティティの問題、文字の問題ですが、ダフール語で話をする人口が今どれぐらいいて、その年齢構成などはどうなっているかということです。

それと 50 年代ですか、文字をいろいろ考えたけれども、だめになったということで、いまそれをダフール民族で使おう、新しく考えようという動きがあるのかないのか。あるいは、モンゴル文字を使うのか。満州文字で書かれても読める人はほとんどいないわけで、そうしたらモンゴル文字で書こうという動きがあるのかないのか。文字のことで動きがあるのかどうかというのを教えていただきたいです。

●暁―　まず、ダフール語を話せる人ですが、はっきり言って少ないです。しゃべれる人は 40 歳より上の人たちです。40 歳以下の人は、ほとんどできません。

モリンダワ地区はダフール族自治旗なのに、それがもっと深刻化しています。それは、漢語教育が背景にあるかもしれません。逆にハイラルでは、モンゴル語教育が中心ですから、モンゴル語を勉強していれば多少は交流できます。家庭的な環境から、話すことは完全にできなくても聞き取ることができます。話せる人は、確かに減少しています。

これが一点と、ダフール語を復活させるということについて。『ダフール語読本』というものが出ていますけれども、そのなかで文法とか、簡単な文章とか、あと『達漢詞典』とか、いろいろ出ています。これはあくまでも研究者など向けで、一般のダフール族の人はそういうことを理解しようしとしないし、使おうとしません。それをどうやって普及させていくかが一つの課題ではないかと思います。

●座長―　後ろで手を挙げておられた方がいますけれども、では、その前の男性の方からお願いします。

●質問者―　興味深いお話をありがとうございました。

昨年、私は和光大学のモンゴル学術祭にまいりましたら、ユ・ヒョヂョンという先生が「『ダウール問題』のダイナミズム」というタイトルで発表なさっていて、日本のモンゴル学者はダフールというアイデンティティについては非常に冷淡で、扱いがこんなにひどいということをずっと並べておられました。一方で、ずっとダフールの人たちが、ダフールというアイデンティティをこれだけ盛り上げようとやっているというかたちで、日本のモンゴル学者の方々を批判されていたのです。

たまたまその会場に、モンゴル学者で高名な方がいらして振られまして、その方がご回答になっていたのは、私にとってのダフール人というのは、オノン・ウルグンゲ先生ですと。亡命学者で、たいへん有名なモンゴル学者です。

先ほどのバタロンガ先生のお話もありましたけれども、ある年齢以上のダフールの知識人というのは、みんなモンゴル人としてのアイデンティティを強く持っていたと思うのですけれども、逆に言うと、いまのダフールというアイデンティティを強く持った知識人なり何なり、影響力を持っているという方は、いらっしゃるのかどうかというのが第一点の質問です。

第二点の質問ですが、これは若干、生活の部分に入ると思います。先ほどもダフール語がどれぐらい使われているかという話があったのですけれども、やはりダフールのアイデンティティを考えるうえで、いま言語と食文化が大事だというのはご発表を聴いてわかったのですけれども、言語といっても実際にメディアにどれぐらい載るかというのは、一つ大きなメルクマークなのではないかと思うのです。

私は最近、フルンバイルの広播電視局のホームページを見たら、フルンバイル盟では漢語以外にも、モンゴル語、ダフール語、オロチョン語、北京語で放送をやっているという話が書いてありますけれども、実際にどれぐらいの規模で、どれぐらいやられているかというのがよくわからないのです。

一つだけ調べてわかったのは、ダフール民族網というところに、ダフールのある程度活躍している人の名前があって、そのなかにスウフォワという人の名前が出ていまして、その人がダフール語の放送のアナウンサーをやっていたと書いてあるくらいなのです。何かわかったら教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

●暁―　まず第一の質問ですけれども、モンゴルに対して主張するということですね。56 年から、ダフールという印がおされてきているのですね。昨日、秦先生からアイデンティティの二重性とか流動性とか、いろいろ出ましたけれども、私自身から言いますと、ダフール人という民族は身分証明書にありますけれども、自分はモンゴルという意識が強いです。これは私かもしれませんが、50 年代後半以降に生まれた人は、おそらくモンゴルに対するそういう意識が薄いのではないかという感じです。もちろん、ダフールというアイデンティティを持った知識人がいます。

地域のメディアについては、エヴェンキ旗に入ると必ず耳にするのは、ラジオ放送の「彩虹」（エヴェンキ語ジュェウェイラ）という伝統的な音楽です。ダフール自治旗のモリンダワに入ると、そういうのがなかったです。ちょうどダフール学会があって、それに参加して、「あれ、ちょっとエヴェンキ旗と違うんじゃないか」という感じがしたのですけれども、旗長が最初に挨拶して、その後、びっくりしたのは旗の歌を奏したことです。ダフール族自治旗の歌をつくっていたのです。

さらにオロチョンなどの地区に行くと、伝統的な踊りを各地ではやっています。でも、こういったものは、メディアといっても、あくまでも一つの特徴を表すものではないかと思います。

●座長―　それでは、後ろのほうの女性の方、お願いします。

●質問者―　今日は、暁敏さんの報告をとても面白く聴かせていただきました。一つだけ質問したいと思います。

前にダフール族はモンゴル意識が強かったのですけれども、自分たちには何の利益もなかったので、モンゴルから離れるとかそういうことで、いま話をしていたのですけれども、差異ということをどう感じているか。ダフール族は、どんなものを民族問題として抱えているか。若干教育問題ですけれどもお教えいただければと思います。

それから、例えば政治的に独立の問題があるか。それとも、これはちょっと過激ですけれども、マジョリティー、つまり漢族に対して、ダフール族の社会において人々は今どんな問題を抱えているか。その実態を教えていただきたいと思います。

●暁―　最後に非常に難しい質問で、ちょっと困っています。独立ははっきり言って不可能です。また漢族に対してダフール族の人々がどのような問題を抱えているかということですが、まず私は、特に意識しておりません。

それから、このシンポジウムに関してこのような話が出たのでお話しします。こちらに周星先生がいらっしゃいますが、いつも強調されるのは「進得去出得来（入ることができるかどうか、出ることができるかどうか）」ということです。こういう観点から見ますと、外部の人がほんとうに少数民族社会に入り込むことができるかどうか。これが一つの視点です。もう一つは、少数民族自身が自分の感情の世界から出てくることができるかどうか。これも一つの大事な視点だと思います。

また、いつも加々美先生が強調されるような主体と客体。少数民族主体にした場合はどう見るか。少数民族を客体した場合は、また違う視点で見ることができます。ですから今回高先生のおかげで、私は必ずしも民俗学と人類学の研究ではないのですが、自民族の立場から、みなさんが少数民族を研究している漢族の方と、こういう交流をすることと対話すること。それに第三者側から見た日本の学者からの視点、これは非常に大事ではないかと気づくことができました。

●伊藤―　課題は何かありますか。

●暁―　課題というよりも問題は一つあります。せっかくいろいろな民族について研究なさっている偉い先生方ばかりなので、一つ素朴な質問かもしれませんが、民族として識別された場合は、政府から下達文件というのはあるかどうか。もしあった場合、見たことはありますか。

●周―　公文書を見たことはないけれども、新聞、例えば『人民日報』ですと、特に国家民族事務委員会とか全人代の民族委員会、第何回の会議で認めたとか、そういう報道が政府の機関紙でしっかり出されました。公文書を見たことはないです。

●王―　最後の民族識別も、たぶん、民族委員会のホームページにまだ公開されています。最後の民族の何々族とか。

●周―　ジノー族です。

●加々美―　ジノー族。

●暁―　なぜかというと。

●伊藤―　それが何か課題と結び付くのですか。

●暁―　いえ、課題ではありませんが。

●座長―　議論は尽きないと思いますけれども、時間の制限もありますので、これまでにさせていただきたいと思います。

今日の報告におきましては、自願の原則でもって、民族識別がなされ、その間のダフール族のアイデンティティの変化のありようみたいなものを、ダフール族の内面に即して報告されたと思います。

さらに司会者として私の希望を付け加えるならば、それに対して中国共産党はどのような政策をとっていたのか。ダフール族がいくら望んでも、共産党が望まない政策は絶対に採択されませんので、むしろそれは中国共産党が巧みに誘導してきたのではないかという予測も可能だと思います。

今後は、中国共産党の民族政策のなかで、ダフール政策がどう変わっていったのかということについて、さらに深めていただきたいと思います。

それでは、第６セッションの報告会はこれまでです。